多くの物語生んだWBC

ウェーブ時評 wave

田中　均
たなか・ひとし＝69年京大法卒。外務省経済局長、アジア大洋州局長、外務審議官を経て（株）日本総研国際戦略研究所特別顧問、（公財）日本国際交流センターシニア・フェロー。

ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）は日本中に歓喜をもたらした。テレビ中継の視聴率は軒並み50%にも達しそうだったし、終わって1カ月が経とうというのにいまだテレビのワイドショーではWBC関連の話題でもちきりだ。稀に見る社会現象と言えるのではないか。

筆者自身も日本が戦った全試合のテレビ中継を見、記事も多く目にした。高い関心を持たれた最大の理由は合宿練習に始まり、決勝戦で日本が勝利するまで、漫画を見るような多彩な「物語」があったからだと思う。それは野球だけでなく、侍JAPANというチームを率いた監督および個性豊かなメンバーの人間の物語であったからだろう。多くの人はそれを自分の生きている舞台に移し替えて見ていたのだろう。栗山監督の人間味あふれ人を動かす能力、二刀流大谷の卓抜な能力、ダルビッシュ投手の「悪ガキ」っぽいイメージから後輩を指導する見事なイメージ転換、村上選手の最年少三冠王獲得者とは思えないがんじがらめの不振からの立ち直り、吉田選手の「これぞプロ」という打撃ぶり源田選手の骨折をみじんも感じさせない活躍、そして多くの若い投手の見事な活躍ぶり。

そして、準決勝のメキシコ戦で1点を追う最終回のシーンには象徴的な物語があった。先頭バッターとして登場した大谷選手には豪快な本塁打を打つ気はさらさらなかったのだと思う。それよりは「狙いすまして」安打を打つ事に集中していた。一塁に向かった時、大谷選手はヘルメットをかなぐり捨てて疾走し、二塁に達した時ベンチを鼓舞する振る舞いを見せた。単打であると次の打者次第でダブルプレーになる恐れがある、二塁打か三塁打で塁上をためたうえで2点をとり逆転することを思い描いたのだろう。二番手の吉田選手は慎重に四球を選び、次打者の村上選手に「次はお前だ」とサインを送った。村上選手の劇的な逆転打で日本は勝利する。

最近、入学式や塾などで若い人達に話す機会が多い。その際私は、グローバル人財となるのに必要な要件としてWBCを引き合いに出している。まず、「多様性」について理解し尊重しなければならない。米国の大リーグが大リーグであるゆえんは野球が伝統的スポーツであるとか、米国人が体格的にも秀でているというだけではなく、世界中からの多様な人財を集め、競争しているからだ。そして「大局」を見る目だ。大谷選手は最終回に試合に勝つ事に狙いを定め、そのためにどうするか、という大局を見た。同時に大谷選手は米国との決勝戦を前に「僕から一つ。今日一日は憧れるのをやめましょう」と述べた。著名な大リーグ選手たちを前に憧れてしまうと戦う意欲がそがれてしまう。相手が誰であれ打ち負かす「批判的精神」を持とうということだ。「批判的精神」がなければ前進はしない。そして最後に、自分は多くの人達に支えられているという認識を欠かさないことだ。WBCの物語がこれ程長続きしているのは、監督や選手を支える人々の物語が心を打つからだ。

米国ではWBCに対する関心はおよそ十分の一だという。しかし、今回のWBCが生み出した多くの物語は日本だけではなく多くの国で語られている。大谷選手のような人財は唯一無二の「二刀流」として米国の中で多くの人々に愛される。まさに、日本が誇る「グローバル人財」だ。